みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

国立民族学博物館所蔵の東南アジア島嶼部採集のカゴ細工について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中村, 俊亀智
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004563

国立民族学博物館所蔵の東南アジア島嶼部採集のカゴ細工について

中　村　俊亀智*

Some Observations on the Basketry of Palawan, Borneo, Java and Sumatra

Takao NAKAMURA

Two major types of basketry technique are recognized, coiling and weaving. Twilling and hexagonal forms of weaving are the dominant types in East and Southeast Asia.

Cane and bamboo are the main raw materials used in both areas.

This paper analizes the National Museum of Ethnology's basket collections from Palawan, Borneo, Java, Sumatra, and compares the techniques employed with Japanese basket-making techniques.

I. 問題提起
II. 採集標本資料の分析
A. フィリピン共和国パラワン島採集資料について
B. ボルネオ採集の資料について
C. インドネシア共和国ジャワ，スマトラ東部採集資料について
III. 若干の考察
附　本文使用のカゴ細工関係用語

I. 問題提起

カゴ細工の系統，ないし，その分布については，すでに，おおよそ，つぎのことが知られている。

1.　カゴ細工には，大別して，「巻きカゴ細工」と「組みカゴ細工」との2系統が

* 国立民族学博物館第4研究部

ある。カゴが，仮りに，タテヨコの2要素から構成されるとすれば，巻きカゴ細工は，ヨコをタテで巻きながら積みあげてゆく手法，組みカゴ細工は，タテヨコを編みあわせ（組みあわせ），それによってカゴの本体をつくりあげる方法ということができる。

2.　そのうち，組みカゴ細工（以下単にカゴ細工という）は，日本，その他の東アジア各地をはじめ，東南アジア地域，南アジア地域，アフリカ，ヨーロッパ，中南米の一部におこなわれている。

3.　なかでも，東アジア地域のカゴ細工と東南アジア地域のそれとのあいだには，つよい共通性（共通的手法）がみとめられる。

なお，この東アジア・東南アジア系のカゴ細工と，ヨーロッパ地域のカゴ細工，アフリカの一部におこなわれているカゴ細工とは，たとえ，カゴ全体の形が似ている場合でも，その手法において（編み方や材料の選択，加工の技術において），大部分の場合，おおきなへだたりがみられる。

4.　しかしたとえば，日本のカゴ細工と，そのほかの東アジア地域のカゴ細工，ないしは，東南アジアのカゴ細工とのあいだに，はたして，どれだけ共通性があり，また，どれだけの違いがあるのかは，充分，つきつめられていない問題となっている。

そこで，この小文は，とりあえず，現在までに，国立民族学博物館に所蔵されている東南アジア地域島嶼部採集の標本資料の分析によって，たとえば，日本のカゴ細工と東南アジア地域のそれとのあいだに，どのような共通性をもとめることができるかを，具体的に指摘しようとしたものである。

この分析のため，ここでは，つぎの手段によった。

1.　国立民族学博物館所蔵の標本資料のうち，収集の経過からみて，その所用地の明らかなものをえらび，1点ごとに，形態，寸法，編み方などを書きとめ，その結果をまとめることにした。

2.　形態，編み方の観察と記録にあたって，これまでつづけてきた，日本列島のカゴ細工についての分析手段を［中村　1977: 823］，とりあえず，試みに，そのまま利用することにした。一般に，標本資料を役立たせるためには，標本資料は，そのままの形では，各種の分析の素材とはなっても，材料とはなりえないから，その形態，構造などを一定の用語によって表現し，確認しておくことが以後の分析のための，前提のひとつとなる。そこで，ここでは，すでに日本列島のカゴ細工の調査によってえられた，本文の附録として加えた「カゴ細工関係用語」の体系を用いて，分析をすすめることにした。

3.　その際，この分析では，カゴ細工の共通的手法の確認に重点をおき，材料の加

工過程や材質の分析はおこなわないことにした。そこで，やむをえず，カゴの本体を構成する材料を，すべて「タケ」と書きしるし，トウその他との区別はしないことにした。

4.　カゴ細工の比較もまた，本来は，その土地土地のカゴ細工の材料調整の方法やカゴ編み作業の過程をしらべ，その土地のカゴの編み方について，その土地の人たちがどう考え，どのような用語体系をもとにして技術がつたえられていくかなどを明らかにした上で，なされねばならないが，しかし，ここでは，そのような本格的比較研究への，ひとつのいとぐちとしての分析にまとをしぼってみた。したがって，このような試みによって，ただちに，日本と東南アジア地域のカゴ細工との同系性や系譜的関係がたどられるとはいえないが，そのような研究への問題発見への布石として，この分析をおこなった。

5.　なお，日本列島のカゴ細工からえられた分析体系が，たとえば変形文法や適用文法のように，ある種の汎用性をもつか否かは，いまのところ明らかではないが，東南アジア地域のカゴ細工にかぎらず，その他の地域のカゴ細工の分析についても役立ちうるとの予想をもつ。他の地域のカゴ細工のこうした分析は，逆に，日本のかご細工の性格や手法をいっそう深く理解するための手がかりがえられるのではなかろうか。

6.　東南アジア地域のカゴ細工は，国立民族学博物館「東南アジア展示」において，代表的な標本資料をみることができるが，ここでは，むしろ，展示されていない標本資料をとりあげることにした。ここでえられた結論は，「東南アジア展示」のカゴ細工からえられるそれと，ほとんどかわらない。

Ⅱ．採集標本資料の分析

A．フィリピン共和国パラワン島採集資料について

ここにとりあげるパラワン島採集の標本資料は，いずれも，関西学院大学パラワン島学術探検隊によって，ひとつの学術資料として収集されたものである。その経過については，すでに，報告書によって明らかで［関西学院大学探検隊　1968: 61, 125］，同地のケン・エイ Ken-ey 族によって用いられているカゴ細工をうかがう，確実な資料ということができる。そのなかには，比較的小形な円口方底形のアジロカゴ，同蓋付きアジロカゴ，バラ形のアジロカゴなどが含まれているが，ここでは，そのうちの4例をあげることにする。

例1　〔標本番号〕3516（3収—1Ⅰ—21—4）〔名称〕籠

口の直径 31.5 cm，底の一辺の長さ 21 ないし 22 cm，高さ 35 cm の円口方底形の台付きアジロカゴで，編み竹には，胴・底とも，幅 5 mm から 8 mm までの，非常に細い身竹がつかわれている。そのためか，このカゴを手にとってみると，思ったよりも軽いという感じをうける。

胴・底の編み方は「2つはね2つくぐり」のアジロ編で，タテヨコの編み竹の交叉する角度はきわめて鋭角的（約30度）である。

このカゴでは，こうした胴の組織の柔弱さを補うかのように，底のまわりに，幅 24 mm，厚さ 2 mm のタケの板が口の字形に取りつけられていて，それがまた，台の役目をかねている。このタケの板の両端はV字形にそぎおとされ，8 cm 以上も重ねあわせたうえ，幅 1.5 mm の身竹で，2 箇所，綴じあわされている。台の役目をするこの板は，カゴの本体からは，きわめて離れやすいから，その 4 隅の曲り角が力竹とも重なりあうようにし，そこを幅 1 mm の皮竹で帯状にかがってとめている。その帯の編み方も一種のアジロのようである。

以上の底の台の内側には，太さ約 7 mm の丸竹が，力竹として，十の字形にかけわたされている。この力竹は，そのまま胴の 4 隅をのぼりつめ，縁を外側からとりくむようにして，縁竹と胴の組織とのあいだにはさみこみ，結んでとめている。力竹は，太さ 1.5 mm の皮竹で，底や胴に結びつけられている。

また，やはり胴の補強のためか，縁から下へ 5 cm おりたところへ，太さ 4 mm の皮竹を帯のようにまいて，内側と外側とから，胴をおさえるようにしている。

縁仕上げは野田口仕上げで，太さ 10 mm のタケをタテ 2 つに割り，それを胴の内側と外側とに縁竹としてあて，縁竹のあいだにできるすきまは太さ 2 mm のツルをおいてふさぎ，その上をきわめて細い（幅 1.5 mm 程度の）皮竹で，およそ 12 mm ごとにかがってとめている。

このカゴには，カゴを背負うための負い緒がつけられているが，それは幅 5 mm の身竹で，よくみると，うすく皮をおとした，しなやかで丈夫なタケであることがわかる。負い緒の両端は隣りあう 2 本の力竹に結んであり，負い緒の長さは約 110 cm で，前頭背負い運搬法（負い緒のまんなかを前頭部にかけて背負う運搬法）で背負うと，カゴの底が，ちょうど，腰のあたりへくることが確められる。

このカゴと同じ形式の標本は，パラワン島採集資料のうち，もっとも多くを占めているが，その寸法と割合は表 1 のようである。

例 2　〔標本番号〕3510（3 収—1 I—21—3）〔名称〕籠

円口方底形台付きのアジロカゴで，右上りの編み竹に煤竹（染竹）をつかい，簡単

な文様を編みだしている。その作り方には，全体としておだやかさがあり，この地方のカゴ細工の典型として，ふさわしいものをそなえている。大きさは，例1とほとんど同じ，口の直径 33 cm，底の一辺 17.5 cm，高さ 28.3 cm である。

表1　パラワン島採集の円口方底形アジロカゴの寸法

標本番号	口の直径/(A)	底の一辺/(A)	高さ/(A)
3516	31.0 cm	0.71	1.13
3515	30.0	0.57	0.97
3517	27.5	0.65	0.96
3520	13.0	0.65	1.35
3519	14.5	0.69	1.03
3518	17.0	0.65	1.06
3513	18.0	0.89	1.07
3509	19.5	0.85	1.21
3510	33.0	0.55	0.85
3514	23.5	0.62	0.98
3511	16.5	0.73	0.88
3512	18.5	0.62	0.84

編み竹には幅 4 mm の身竹がつかわれ，それが，底部では，ほぼ直角に，胴の部分では約30度でまじわるように組み，口のひらいた底すぼみの円口方底の形をつくりあげている。編み竹は，いずれも皮をごく薄くへいだものである。

胴の編み方で注目されるのは，中央から上の部分と，やや下の部分に，黒く染めた染め竹（煤竹）を6本ずついれて，右上りの帯状の文様を編みだすことである。よくみると，染め竹は，その両端に色がのこり，まんなかには色がみられず，まんなかの部分がくる腰立てのあたりは，あたかも，ぼかしたかのような趣きをていしている。

このカゴにも，胴の4隅と底の部分に太さ 8 mm の力竹が2重にいれてあり，例1と同じように，底の力竹は4隅を結ぶ対角線形に，十の字形に取りつけられている。また，胴の4隅にかける力竹は，そのまま縁までのぼり，例1と同じように，外側から縁をとりこむようにして縁に結びつけ，再び底までおりてゆき，底の面から約 25 mm 下のところで切りそろえられている。そのため，若し，このカゴに台の部分がとりつけられていなかったら，4本の短いアシがみられることであろう。これらの力竹は，いずれも幅 1 mm の皮竹でカゴの本体に結ばれている。

力竹以外，例1と同じように，このカゴにもまた，縁から 5 cm ほど下の部分に，幅 4 mm の皮竹をカゴの内側と外側とにかけ，その上から，幅 1 mm の皮竹をかけて胴の組織をおさえる手法がみられる。

縁仕上げは野田口仕上げで，太さ 10 mm のタケをタテ2つに割って縁竹にし，それぞれ，胴の内側と外側とにあて，それを約 10 mm の間隔で，幅 1.5 mm の皮竹をつかって，かがってとめる。このカゴでは縁竹のあいだのすきまは，幅 3 mm の身竹をいれてふさいでいる。

台の部分は，幅 35 mm，厚さ 2 mm の木かタケの板でつくられ，その接合には幅 2 mm の皮竹がつかわれている。その皮竹のかけ方も，詳しくは述べないが，きわめて特徴的で，台の部分がカゴの本体からはなれないように，力竹といっしょにかがられている。

例3　〔標本番号〕3521（3収—1 I—21—4）〔名称〕籠

蓋付き円口方底形のアジロカゴで，編み目の密度がたかく，いっそう細かい仕事がなされている。口の直径は 23 cm (最大幅 24.5 cm)，底の一辺の長さは17ないし 18 cm，高さ 27 cm で，底・胴とも，幅 3 mm の身竹をつかい，「2つはね2つくぐり」のアジロ編の編み方がみられる。編み竹のまじわる角度は約60度で，組織全体が織物を思わせるようなしなやかさをもっている。

このカゴにも，例1，例2と同じように，幅 3 cm のタケの板を口の字形に折りまげて底の下につけ，台の役目をさせている。台は，上端に近いところに穴を穿ち，幅 1 mm のタケでカゴの本体に結びつけられている。このカゴもまた，例2のように，台の各辺の中点と力竹の交点をタケでかがり，台と底の部分との接合に苦心している様子がうかがえる。

力竹も，例2と同じように，底の部分に太さ 7 mm のタケを十の字形にいれ，それを胴の隅の力竹になるようにして，細いタケで胴の本体に結びつけている。また，胴の上部には，幅 4 mm の皮竹が帯状にとりつけられていて，いずれも，胴を内側と外側からおさえている。

縁の仕上げは野田口仕上げで，太さ 7 mm のタケをタテ2つに割り，それをつかって胴を内側と外側からはさみ，その上から幅 1 mm 弱の皮竹を 5 mm の間隔でかがって仕上げている。縁の上には，幅 25 mm，厚さ 2 mm のタケの板を曲物状に綴じあわせたものをのせ，そこに蓋がかみあうようにしている。

蓋はたいらな半球体形をしており，その縁は，やはり野田口仕上げの方法で処理されている。ただし，本体とちがい，蓋のアジロの編み方は，編み竹を直角に交叉させ，「2つはね2つくぐり」に組んでいる。この蓋の編み方は，つぎにあげる例4ともほとんど共通で，このカゴは，例1や例2の円口方底形のアジロカゴに例4のようなカゴの形を結びつけてできあがったといってもよい。

表2　パラワン島採集の蓋つきアジロカゴ

標本番号	口の直径 (A)	底の一辺/ (A)	高さ/ (A)
3524	28.0 cm	0.63	1.25
3526	10.0	0.70	1.70
3523	15.0	0.87	1.47
3525	15.5	0.84	1.87
3522	21.0	0.71	1.57
3521	24.0	0.75	0.67

負い緒は幅 10 mm で，木の皮をたたいて帯状にのばしたものらしく，その両端は，隣りあう2本の力竹に結んでとめてあり，この標本では負い緒の途中が失われているが，その取りつけ方からみて，このカゴも前頭背負運搬法によって背負うことができるものであることを示している。

表3　パラワン島採集のバラ形カゴ

標本番号	口の直径 (A)	底の一辺/ (A)	高さ/ (A)
3507	50.0	—	0.14
3508	36.5	—	0.12
3506	42.0	—	0.11
3505	38.0	—	0.15

例4　〔標本番号〕3507（3収—1 I—21—3）〔名称〕箕

南九州から南西諸島にかけて，バラといって，たいらな皿形のカゴが用いられている。その編み方はアジロ編で，縁の仕上げは，おおむね，野田口仕上げを基調としている。このカゴの形もまたそのバラに似ており（この種のカゴをバラ形のカゴという），口の差しわたしは長径 51.5 cm，短径 48.5 cm，高さは約 7 cm である。

編み竹には幅3ないし 5 mm の身竹がつかわれ，「3つはね3つくぐり」に組まれている。編み竹がまじわる角度は，ほぼ直角で，つかいふるしたせいか，多少，いびつである。

縁仕上げは野田口仕上げで，太さ 10 mm の丸竹をタテ2つに割り，それを縁竹にして，胴を内側と外側からはさみ，その上に幅 2 mm の皮竹を約 10 mm ごとにかがってとめている。このかがり方は日本の野田口仕上げのやり方よりも，かがりダケの間隔が非常にせまい点が特色となっている。縁竹のあいだのすきまは，幅 3 mm の皮竹を平三つ組に編んだものでふさいでいる。このあたりが，このカゴでは，わずかにみられる装飾的要素となっている。こうした野田口仕上げの際の縁竹のすきまをふさぐ手法は，他の同じ形式のカゴにも共通で，なかには，組み竹の幅がせまく，縁竹のすきまが充分にふさがらなくなってしまい，文字通り，形骸化しているものすらある。

B．ボルネオ採集の資料について

ボルネオのカゴ細工については，これまでにも，すでに，いくつかの研究がなされ，とくに，アジロの文様編みや特異な六つ目の背負カゴなどの技術が注目されている。

以下の標本資料は，ボルネオ北部のカゴ細工の特徴をうかがう，よい資料と考えられるので，ここにとりあげる。そのなかには，円口方底形の野田口仕上げのアジロカゴ，円口方底形共縁のアジロカゴ，円口方底形アジロ編の背負いカゴ，四つ目編野田口仕上げの背負いカゴ，六つ目編背負いカゴ，アジロ編野田口仕上げの袋形背負いカ

ゴなどの7種類が含まれている。

例5　〔標本番号〕2635（3収—1G—24—5）〔名称〕籠（小物いれ）

円口方底形の編み目がきわめて細かいアジロカゴで，口の直径 32 cm，底の一辺 19 cm，高さ 20.5 cm である。編み竹には，幅 2 mm の，ごく薄い皮竹がつかわれており，そのためか，胴にも底にも弾力性が感じられる。

この標本では，底も胴もアジロ編でつくられているが，その編み方には，若干の違いがみられる。

まず，底の部分では，中心部をなす 16 cm 四方の部分は，タテヨコの編み竹の通し方をかえ，たとえば，タテは「4本はね1本くぐり」，それに対して，ヨコは「4本くぐり1本はね」で組みあわせ，腰立に移るとき，その組みあわせ方をすこしずつかえるようにして，ちょうど，折り紙の風車のような文様を編みだしてゆく。もちろん，底のこの文様は，普通の状態では目につかないはずだが，それにもかかわらず，念いりに編みこまれている。

胴の部分は，編み竹を2本ずついっしょにして，およそ60度の角度を保って，「2本はね2本くぐり」の型で編んである。なお，縁から約 5 cm 下のところからは，その編み方をかえ，いままで2本ずついっしょにしてきた編み竹を，1本ずつにもどし，「3本はね3本くぐり」で編んである。これは，縁下（ふちした）の部分の組織を強化するためになされたのだと思われる。

縁は，野田口仕上げで，タケか木か，材質はさだかでないが，仮りにタケとすれば，タケを，タテ2つに割り，胴の編み目の上の部分を内外からおさえ，それを幅 2 mm の皮竹で 12 mm ごとにかがり，また，縁竹のあいだにできたすきまは，太さ 2 mm のトウをはさみこんで，ふさぐようにしている。このトウも双子編に編み，装飾性をもたせている。

表4　ボルネオ採集の円口方底形野田口仕上げのアジロカゴ（小物いれ）

標本番号	口の直径 (A)	底の一辺/(A)	高さ/(A)
2634	24.0	0.60	0.73
2635	31.0	0.65	0.66
2620	31.0	0.68	0.58
2616	29.0	0.64	0.71
2607	29.0	0.66	0.81
2594	13.5	0.67	0.59
2591	21.0	0.67	0.60
2682	32.5	0.74	0.52
2662	33.5	0.75	0.63
2704	26.0	0.71	0.73
2671	31.5	0.63	1.05

例6　〔標本番号〕2634（3収—1G—24—5）〔名称〕籠（小物いれ）

口がやや開いた円口方底形のアジロカゴで，タテヨコの編み竹の組み方をかえ，胴の部分に帯状の文様が編みだされている。寸法は，口の直径 24 cm，底の一辺は

14 cm，高さ約 18 cm で，前記の例5より，ひとまわり小形につくられている。

編み竹には，例5よりも幅がひろい，幅3ないし 4 mm の皮竹がつかわれている。

表5　ボルネオ採集の円口方底形共縁のアジロカゴ（小物いれ）

標本番号	口の直径 (A)	底の一辺/(A)	高さ/(A)
2617	20.0	1.25	0.85
2613	20.0	1.05	0.90
2656	17.0	0.74	0.94

底の編み方は，例5の場合と同じように，中心部では，「4つはね1つくぐり」ないし「1つはね4つくぐり」のアジロ編で，やはり，折り紙の風車形の文様が編みだされている。

胴の編み方は「3つはね3つくぐり」のアジロ編であるが，途中で編み方をかえ，「4つくぐり3つとばし」などの型の編み方によって，3本の帯状の文様をつくりだしている。そして，縁の下から約 4 cm のところから上部分は，「3つはね3つくぐり」の編み方でまとめている。

縁仕上げは，一種の野田口仕上げで，太さ 10 mm のタケ（材質は確認できない）を塗料で着色し，それをタテ2つに割ったもので胴を内外からおさえ，その上にさらに太さ 3 mm のトウの輪をのせ，それらを，幅 2 mm の皮竹でかがってとめている。そのかがり方が等間隔におこなわれず，皮竹は8カ所にまとめられ，3 mm ほどの間隔で1カ所に9筋から11筋まかれている。こうした野田口仕上げのやり方は，日本のカゴ細工には，ほとんどみられないやり方である。

このカゴでは，縁を 2 mm のタケでかがるまえに，力竹をかけるらしく，太さ 10 mm の力竹が縁竹をおさえるように逆U字形にかけてあり，その力竹は，幅 2 mm の皮竹で，胴の組織に結びつけられている。

一般に，野田口仕上げでは，縁竹をかがる細いタケは，縁の下をまわすのが定法であるが，このカゴでは，縁の上に，もう一重，縁にあたるものをのせ，縁竹をかがった細い竹を縁の下にまわさず，縁竹の上にのせた「縁にあたるもの」の巻き竹にして，まわしてゆくやり方がなされている。ここでは，このやり方を野田口仕上げの一種とみたが，そのどちらが野田口仕上げの本来の形であり，それらは，どのような系譜的つながりをもつのか，あるいは，別系列と考えるべきなのかは，いまのところ，はっきりしていない。

例5，例6と同形式のカゴは，ボルネオ収集資料のうち，もっとも多数を占める。その寸法，各部割合は表4，表5に示すごとくである。

例7　〔標本番号〕2633（3収—1G—24—5）〔名称〕背負い籠（子供用）

負い緒つきの円筒形に近い円口方底形の目編のカゴで，編み竹には，幅 5 mm の，丈夫な皮竹が用いられている。負い緒は，幅 8 mm で，三つ平組である。

底部の編み方は四つ目編であるが，その目の大きさは，タケの幅とほぼ同じ大きさの 5 mm 前後で，きわめて密度がたかいのが特色である。

それに対して，胴の編み方は，同じ四つ目編でも，意識的か偶然か，やや目を大きくしている。そして，胴の上部（縁下 8 cm の部分）は，いままでの編み竹のあいだに，同じくらいの幅のタケを1本ずつはさみこみ，目をうめるようにしている。このため，この部分は，2本ずつタケを1組にして，「1本はね1本くぐり」の，いわゆる市松の編み方となっている。ここにもまた，なにげない日常用いるカゴでありながら，ちょっとした，心づかいがみられよう。

縁は野田口仕上げで，太さ 10 mm のタケ（トウ）をタテ2つに割り，それを縁竹として胴の上部をはさみこみ，つぎに，同じくらいの太さのタケをカゴの四隅にそえ，それから，ひとまず縁竹を胴の組織に，3 cm の間隔で野田口と同じように結びとめ，さらに，縁竹よりはずっと細い太さ 5 mm のタケを縁竹の上にのせ，最後に，幅 2 mm ほどの巻竹で，縁竹ともども，12 mm ごとにかがってとめている。こうして，このカゴでは，例6で，かならずしも明らかでなかった一種の野田口仕上げの手法が，はっきりと観察できる。

このカゴでは，負い緒をとりつける，いわゆる耳は，4カ所にあり，その位置は縁の部分に隣りあって2つ，底の部分に2つとなっている。これのみでは，リュックのように両肩に負い緒をかけて背負うのか，それとも，前頭背負運搬法によって背負うのか，その点は明らかではない。

例8　〔標本番号〕2631（3収—1G—24—5）〔名称〕背負い籠

ヨコ 28 cm，奥行 25 cm，高さ 55 cm の六つ目編のカゴで，全体の形は，半円筒形である。

ところが，六つ目編の背負いカゴといえば，おおむね，円筒形で，底と胴とが一体となっている，たとえば，草刈りカゴのようなものが思いだされるが，このカゴは，そうしたカゴとは，おおいに異なり，背中にあたる，いわば背中当て（背負い板）部分と，その他の部分とを，それぞれ別々にこしらえ，それらを結合させてカゴの形をつくりあげるという，まったく違った作り方がなされている。

その様子を，やや詳しくみてゆくと，半円筒形の曲面部分（背中当て以外の部分）は，幅6ないし 8 mm の皮竹で編まれており，廻し竹にあたるタケの間隔は 3 cm，立竹の間隔は 22 mm ほどとなっている。

いま，この部分のタケ配りを画いてみると，それは，たぶん，つぎのようにして編むのではないかということが考えられる。まず，幅 7 mm の皮竹を3本用意し，それを三つ丸組(まるぐみ)に組み，太さ 8 mm の紐をこしらえる。その紐を地上において，ヨコ 23 cm，タテ 110 cm の細長い隅丸矩形(すみまるくけい)の枠をつくり，後にのべる背中当ての部分と同じ要領で立竹，廻し竹をかけてゆき，枠の内側に六つ目の編み目をつくりあげる。そして，その長辺の一方を，背中当て部分に，背中当てを編むときに，いっしょに取りつけてゆく。

いっぽう，背中当て部分は，はじめ，太さ 12 mm の丸竹を折りまげて，ヨコ 29 cm，タテ 50 cm の隅丸矩形の枠をつくり，それに，幅4ないし 5 mm の皮竹をからげて，タテヨコ約 35 mm の六つ目を編んでゆく。六つ目の廻し竹（ただし，カゴができあがった状態では水平方向ではなく垂直方向にならぶことになる）の間隔は約 3 cm，立竹の間隔は 2.5 cm で，ややタテながの目の形となっている。

六つ目を形作る立竹と廻し竹の様子を図に写しとり，そのタケ配りをみると，立竹も廻し竹も，もともと，4本のタケで編んであることが明らかになる。その場合，縁のところでのタケの返し方（結び方）は，図1のように，上下辺と左右辺では異なり，また，タテの2辺でタケを結ぶとき，すでに作りあげておいた曲面部の枠と背中当て部分の枠とを，いっしょに接合してゆく。

こうして，背中当てに曲面部分をとりつけてしまうと，背中のまうしろで出合うはずの曲面部分の長辺（曲面部分は結局 U 字形にたわめられ，その下のふくらみの部分がカゴの底となる）を，幅 4 mm の皮竹で軽く結び，口をとじあわせる。

負い緒は，木の皮を幅約 3 cm にさいた帯状のもので，カゴの底に2カ所，耳をとりつけ，その耳と背中当ての上端左右を結んでとりつけられている。その様子から

表6　ボルネオ採集の円口方底形の背負いカゴ

標本番号	口の直径 (A)	底の一辺/(A)	高さ/(A)
2603	42.5	0.64	1.15
2606	29.0	0.72	1.31
2604	35.0	0.66	1.21

表7　ボルネオ採集の野田口仕上げの四つ目背負いカゴ

標本番号	口の直径 (A)	底の一辺/(A)	高さ/(A)
2681	41.0	0.61	1.21
2672	53.0	0.57	1.32

表8　ボルネオ採集の六つ目背負いカゴ

標本番号	口の直径 (A)	底の一辺/(A)	高さ/(A)
2631	28.0	1.96	0.89
2632	30.0	2.47	0.67
2585	23.0	2.17	0.87

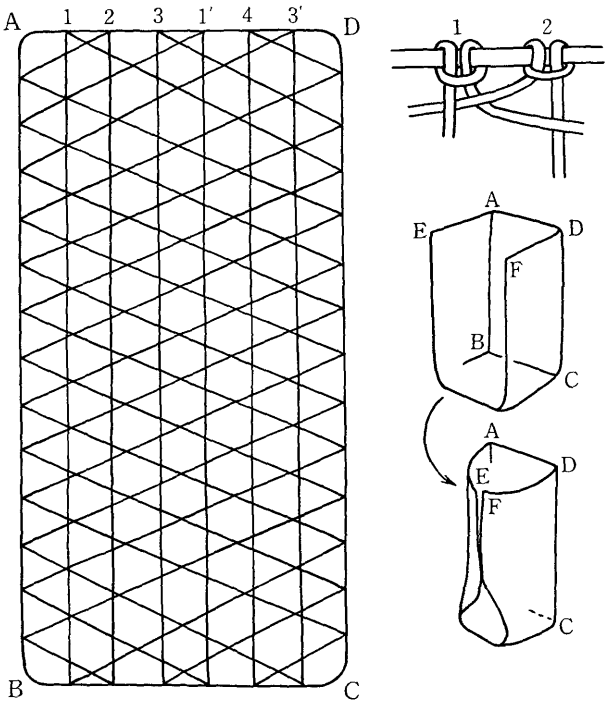


図1　ボルネオ島採集の背負いカゴ〔例8〕の竹配り
口 ABCD は背中当ての枠を示す。この編み目は1,2,3,4の4本のタケのループで構成されている。
右上は枠の1,2点におけるタケの結び方。右中，右下の図はカゴの成りたちを示す。

みて，このカゴは，リュックのように両肩に背負うものだったことがわかる。なお，耳は，長さ 5 cm で，幅 3 mm の皮竹をまるく編んでつくられている。

ボルネオ収集の資料中，この種のカゴは約4点で，その寸法等は表8のようである。ただし，ここにあげたもの以外は，立竹，廻し竹の間隔がいずれも10ないし 15 mm で，この例よりも，いっそう細かい編み方がなされている。

C．インドネシア共和国ジャワ，スマトラ東部採集資料について

以下にあげる標本資料は，1977年，インドネシア共和国のジョグジャカルタ，バリックパパン，マランその他で採集されたもので，やがて，本館の所蔵資料となったものである。その収集の経過については確かな記録がのこされていて，同地方のカゴ細工の現状を知るよい資料ということができる。そのなかには，女性・子供用の背負いカゴ，円口方底形のやや深いカゴ，円口方底形の浅いカゴ，穀物選別用の半球体形

（ソウケ形）のカゴ，そのほか，半円筒形のトウ製のカゴなどが含まれているが，そのうち，3例だけをあげてみる。

例9　〔標本番号〕9948（3収—2L—23—1）〔名称〕藤と竹の背負いカゴ

口の直径 34 cm，底の一辺が 15 cm，高さ 37 cm の円口方底形の背負いカゴで，背負いカゴのうちでは比較的小形，しかも，全体が細かいザル目編を基調にしている点がひとつの特徴となっている。

編み竹は，幅7ないし8 mm の皮竹で，皮の面のまんなかが薄くへいであり，面をたいらにする工夫がなされている。

底の編み方は，四つ目編で，タテヨコ9本に10本のタケを組みあわせ，約 10 mm 四方の四つ目をつくり，そのあいだへ，幅 7 mm，長さ 13 cm のタケをいれて，目を完全にふさいでいる。

胴は，ザル目編で，底からあがった幅 7 mm の立竹に幅 5 mm の廻し竹をからませて編む。ところが，口のあたりで立竹の本数を数えてみると55本で，そのうち，底からあがった立竹は38本の勘定だから，それに17本が追加されていることがわかる。そこで，改めて，この胴だけにつかわれている立竹を調べてみると，それらは，カゴの前後左右4面それぞれ，両側に近いところで，しかも，底からあがってきた立竹のあいだへ，ほどよく追加されていることがわかる（1本だけ面の中央にいれてあるものがある）。底が四つ目編で，しかも，このように口が開いたカゴでは，胴からの立竹だけでは，カゴの上部で立竹の間隔がひらいてしまうから，このようにして，立竹の間隔を等しく保つ工夫をしたのだろうと思われる。この胴で新しく加わる立竹は，胴の廻し竹の9段目あたりから挿入されてゆく。立竹の間隔を等間隔に保つ編み方には，このほか，底を2本1組にしたタケで編んでおき，それを胴のところで，1本1本独立させるやり方がなされているが，ここでは，あくまで，胴編の際の立竹の追加で問題の解決をはかろうとしている点がおもしろい。

縁は野田口仕上げで，太さ 12 mm のタケをタテ2つに割り，それを縁竹にして，内外から胴の上部をはさみ，そのあいだへ太さ 4 mm の植物のツルをいれて口をふさぎ，幅 2 mm のトウの皮竹で 5.5 cm ごとにかがってとめている。

このカゴには，底の4辺と胴の4隅に力竹にあたるものがいれてあり，胴や底の組織を補強している。まず，底の部分には，長さ14ないし 13 cm，太さ 10 mm の木の枝（皮ははいでおく）を口の字形に組みあわせ，それを底の4辺にあて，その角（かど）に，胴の力竹にあたる太さ 12 mm ほどの木の小枝の末端がくるようにし，縁のかがり竹と同じくらいの幅の皮竹で，枝に穴をあけたり，切りこみをいれたりしながら，底ご

と巻いてとめている。

なお，この標本では，胴の内側に幅 7 mm，厚さ 2 mm の皮竹をいれ，外側の力竹の役目をする木の小枝ともども結びつけてある。

このように，このカゴには，きわめて実用的な背負いカゴであるにもかかわらず，幅がせまい皮竹をつかい，木の枝などを加えて，密度のたかい細工がなされている有様をみることができる。

例10　〔標本番号〕9922（3収—2L—24—3）〔名称〕竹籠

口の直径 33 cm，底径 22 cm，高さ 20.5 cm の，台付(だいつ)きの一種のアジロカゴで，このほか，これよりやや小さい同じ形式のカゴも収蔵されている。小形のほうには，随所に力竹が挿入され，念いりな仕事がなされているが，ここでは，それよりも簡単な作り方のこの標本をとりあげる。そこには，ほとんど，日本ではみられない，複合的なカゴの編み方がなされている。

底は 2 重で，胴につづくカゴの本体の底は，六つ目編を基本にし，それに 3 本ずつのタケを加えてすきまをふさいでいる。その目の大きさは，わずか 11 mm で，それに 3 本のタケをいれて，完全に目をふさいでゆくので，底の編み方には，きわめてたかい密度が感じられる。

その反対に，外側の底(下側の底)は，幅 12 mm の身竹を「2つはね2つくぐり」に組んだアジロの板で，本体とは対照的に，素朴な味わいすらただよわせている。

胴の編み方は一種のアジロ編で，幅 5 mm の皮竹を，右あがりの編み竹は「2つはね1つくぐり」に，左あがりの編み竹は「1つはね2つくぐり」になるように組みあわせ，アジロに変化をもとめている。

そして，このカゴでは，その編み竹のあいだへ（編み竹の編み目の内側へ），約 10 mm のあいだをおいて，太さ 3 mm，厚さ 2 mm の身竹を，水平方向に，ちょうど，カゴを渦巻形に巻きあげるようにして，いれてゆく。

これは，はなはだ珍しい手法で，内側にいれるタケ配りは，カゴ細工のひとつの手法としての巻きカゴ細工を思わせ，事実，このタケによってひきおこされる表面の凹凸は，巻きカゴのもつ趣きをただよわせている。このカゴの全体としての比例関係も，ある種の巻きカゴ細工の姿かたちを思いおこさせる。

縁は野田口仕上げで，幅 16 mm の薄い身竹を外側に縁竹としてあて，内側には厚さ 5 mm の身竹をそえ，そのあいだへ厚さ 3 mm のタケをいれて口をふさぎ，それらを，幅 2 mm の皮竹で，6 mm 内外の間隔をおいて，かがってとめる。こうしてできる縁の厚みは 15 mm にもおよび，カゴの縁の内側には何かワラでも束ねていれ

ていたのではないかと思わせるほどである。このような太い縁作りは，ある種の巻きカゴのそれを思わせる。

なお，この標本以外の1例では，野田口のかがり方がより複雑で，かがりのタケをおさえるために，カゴの内外に幅 3 mm の身竹がそえられている。このカゴにも，その身竹の痕跡とも思えるものが，わずかにそえられている。

このカゴには，台の役目をするものがとりつけられているが，それは幅 35 mm，厚さ 3 mm の身竹でこしらえられたタケの曲物で，その取りつけ具合から，はじめに，カゴの本体の底の部分に，すでに触れた外側のアジロ底をあて，つぎに，その円周にそって太さ 8 mm，厚さ 7 mm の皮竹をあて，その皮竹の外側へタケの曲物の上端をあてがい，またその曲物の上部外側に幅 12 mm の薄い身竹をかけ，アジロ底，厚い皮竹，薄い身竹，曲物ともども，約 9 cm の間をおいて，幅 2 mm のヒゴでカゴの底にかがってとめている。そこには，必要以上に入念なとも思えるほどの底作りがなされている。

例11　〔標本番号〕9915（3収—2L—24—2）〔名称〕竹籠

ジョグジャカルタで入手したという円口方底形のザル目編のカゴで，表10のように，大小とりまぜて4点収集されている。ここでは，そのうち，もっとも大形のものをとりあげる。そこには，これまであげてきたカゴとも，また，日本のカゴ細工にもみられない，いかにも日常のカゴにふさわしい，おおまかさをみることができる。材料のタケにもまた，幅のひろい身竹がつかわれている。

表9　スマトラ島マラン採集の円口方底形のアジロカゴ

標本番号	口の直径/(A)	底の一辺/(A)	高さ/(A)
9922	33.0	0.62	0.67
9921	30.5	0.61	0.64

表10　ジョグジャカルタ採集の円口方底形ザル目編のカゴ

標本番号	口の直径/(A)	底の一辺/(A)	高さ/(A)
9919	22.0	0.59	0.52
9918	27.0	0.59	0.52
9917	32.0	0.59	0.42
9915	41.0	0.63	0.37

底の編み方は，「2つはね2つくぐり」のアジロ編で，タテヨコ8本ずつ，合計16本のタケで構成されている。ところが，それらの編み竹は幅が一様ではなく，まんなかへ，もっとも幅のひろい（幅 4 cm の）編み竹を2本ずついれ，まんなかから遠ざかるにしたがって，漸次，タケの幅はせまくなり，両端には，幅 2 cm の編み竹がつかわれている。これは，たいへん大胆な編み方といえよう。

これらの底を形作った編み竹は，そのまま胴の立竹にかわるが，したがって，立竹

の幅もまた一定ではないが，細工のしにくい，カゴの隅の部分に，ちょうど，幅のせまいタケがくるようになるから，さほど問題なく，処理されている。ただ，幅のひろい，まんなかの立竹は，腰立てのとき，厚くてたわめられないので，折りまげられている点が，いささか気にかかる。

胴の編み方はザル目編で，廻し竹には，底に近い部分に幅 3 mm の身竹，縁に近い部分には，幅 2 mm の身竹がつかわれている。底に近い，腰立ての場所を補強するかのように，底の外側四周には，幅 12 mm の煤竹が，2本1組で，井の字形にそえられている。

縁仕上げは，一見，野田口仕上げのようにみえる，一種の巻口仕上げで，幅 12 mm，厚さ 1.5 mm の皮竹（煤竹）をいちばん外側に縁竹としてそえ，その内側へ同じくらいの幅のタケを1枚はさみ，そのまた内側に，あたかも曲物を思わせる，幅 5 cm，厚さ 2.5 mm の身竹の縁竹をあて，その身竹の下端に小穴を穿ち，外側の縁竹ともども，幅 2 mm の皮竹で巻いて仕上げる。もっとも内側の幅のひろい縁竹は，両端を 14 cm も重ねあわせて接合し，それを幅 2 mm の皮竹で，4個所綴じあわせている。その綴じ方が装飾性をそなえ，そこには，カゴ細工の技術と曲物の技術との結合をみることができる。もしこのカゴに，蓋があったとすれば，それは，カブセ蓋の形式のものだったのではなかろうか。

Ⅲ．若干の考察

1．アジロカゴの盛行

東南アジア地域島嶼部のカゴ細工がもっている傾向のひとつに，アジロカゴの盛行があげられる。以上の標本資料によっても，そのことはうかがえよう。

そのアジロの編み方も，幅のひろい編み竹を多用する日本の，とくに，民具としてのカゴ細工とはおおいにちがい，幅のせまい編み竹をつかった，きわめて密度のたかいアジロ編ということができる。ひとつには，素材の材質のちがいもあろうが，民具としてのカゴ細工をみなれた目には，その作風が，日常の生活用具というよりも，工芸にちかいものに受けとれる。また，これらのアジロのうしろにひそむ，カゴ細工そのもののおかれた条件のちがいを感じさせられる。

ここにあげたアジロカゴのなかには，例5，例6のように，染め竹を用いて文様を編みだす，いわゆる文様アジロの手法を発展させている例もみられる。

円口方底形のカゴといえば，アジロ底で胴がザル目編のカゴを思いうかべるが，こ

の地域では，形は同じ円口方底形でも，アジロ底で胴もアジロ編のカゴが多くを占める点にも興味をひかれる。

2. アジロと巻きカゴ細工との結合

すでに記したように，例10では，アジロカゴの胴の編み目のあいだへ，外部からはみえないように，あたかもシンのように，細いタケが渦巻形にいれられている点に注意した。

この手法は，あるいは，組みカゴ細工の技法としてのアジロ編に巻きカゴ細工の手法がとりいれられた結果とも考えられ，日本のカゴ細工には，ほとんど，見いだすことができない手法ということができよう。

例10には，このほか，底の作り方にも特色があり，その示す技法には注目すべきものがある。

3. ボルネオの六つ目編背負いカゴ

六つ目編の背負いカゴといえば，円筒形で目があらい。草刈りカゴやクズハキカゴが思いだされる。しかし，六つ目カゴが，こうした形態をとるのは，けっして一般的ではなく，同じ背負いカゴでも，ネパール国採集の円錐形の六つ目カゴなど，円筒形の六つ目カゴからは思いもよらないタケ配りがなされている［中村　1973: 89–91］。

ここにあげた例8のボルネオ採集の六つ目カゴにも，日本の円筒形六つ目カゴとは全然異なる発想がみられる。

六つ目という編み方は，落ちこぼれの心配がない，かさの割りには目方が軽いものを運ぶカゴの編み方として，もっとも適したものだといわれるが，円筒形の大形六つ目カゴが完成されるまでには，おおくの試行錯誤がなされていたのではなかろうか。

4. 野田口仕上げ

ここにあげた諸例からもうかがえるように，東南アジア地域を通じて，野田口仕上げの方式による縁仕上げがひろくおこなわれている。縁仕上げの方式には，野田口仕上げのほか，巻口仕上げ，蛇腹巻き，共縁などの手法があり，日本のカゴ細工では，野田口仕上げは，むしろ，上品で丁寧な縁づくりとされているが，東南アジア各地では，この仕上げ方が，かえって主流をなしているのではないかと思われる。

縁仕上げの手法は，カゴ全体の形や用途とも関係しているが，以上の事実は，野田口仕上げの系譜を暗示するものとして興味深い。

野田口仕上げには，例6のように，縁の上にさらに，タケをのせる，いわば二重縁(にじゅうふち)のものがあり，同じ発想は，南九州そのほかのカゴ細工にものこされているので，その点も問題となろう。

5. そ　の　他

例11をはじめ，この地域のカゴの台の部分に，幅のひろいタケを曲物状にしたものが取りつけられている例に接する。そこにもまた，タケの多面的な利用法をうかがうことができる。

なお，カゴ全体の寸法や各部の割合については，別に国内外の比較対照のための作業をすすめているので，ここでは，表によって，値だけをあげるにとどめた。

附　本文使用のカゴ細工関係用語

凡例

一．カゴ細工の用語（術語）は，その土地によってそれぞれの表現があり，なかには，その表現が必ずしも一定していない場合があるが，ここでは，「日本列島におけるカゴ細工の諸系列」使用の用語をもとにして「中村　1977: 823]，とりあえず，以下のようにした。

一．用語は，なるべく簡単で，しかも，分析上必要なもののみにとどめた。

一．用語の配列はアイウエオ順にしたがった。

一．各項とも，最初に本文使用の表現をかかげ，つぎによみ方，または漢字をあて，それに簡単な説明を加えた。

一．なお，別の視角から日本のカゴ細工をみることによって，ここにあげなかった用語や用語体系をたてることができる。それによって国外のカゴ細工を分析すれば，あるいは，ここでは気づかなかった新しい見方ができよう。

ア　行

アジロ編(あじろあみ，網代編)　タテヨコ2方向のタケを，すきまなく組みあわせるカゴの底または胴の編み方。その組みあわせ方には，たいていの場合規則性があり，それを「2つはね2つくぐり」（あるタケが出会った相手のタケの上を，まず2本とびこし，つぎに2本のタケの下をくぐる過程を繰りかえす)，「3つはね2つくぐり」，「1つくぐり2つはね」などという。「1つはね1つくぐり」のときには市松(いちまつ)といわれる文様と同じ文様ができる。タケの組み方をかえることによって，右または左上りの文様（これを坂道（さかみち）という人もある)，回の字形の文様（同じく枡組（ますぐみ）という人もいる)，山の字形の文様などができるが，ここでは，そ

れらには触れなかった。

編み竹（あみだけ）　カゴを構成するタケの総称。アジロの編み竹といえば，タテヨコに組まれているタケのすべて。

円口方底形（えんこうほうていがた）　口が円形で底が方形の形をしたカゴの形容。底が四つ目編またはアジロ編のカゴのうち，ある種のカゴがこの形となる。

カ　行

カゴ（籠）　タケ，ヤナギ，イタヤ，ワラ，カヤその他の材料を線状または帯状に加工したものを組みあわせて（編みあわせて）つくられる運搬具，容器の総称。いわゆるザル（笊）も含まれる。一般に，底（そこ），胴（どう），縁（ふち），その他（負い緒など）の4部分にわけることができる。縁を編む過程はカゴの本体をしめくくる過程ともなるので，とくに縁仕上げ（ふちしあげ）という。

皮竹（かわだけ）　タケは皮の部分（表皮）と身の部分（維管束部分）にわかれるが，そのうちの表皮をとらずに用いる編み竹のこと。

サ　行

ザル目編（ざるめあみ，笊目編）　立竹に廻し竹をすきまなく組みあわせる編み方で，いわゆるザル(笊)をあむときの編み方。胴あるいは底の編み方としてつかわれる。

蛇腹巻（じゃばらまき）　縁竹のうえから縁巻竹を蛇腹形（じゃばらがた）に巻く縁仕上げの手法。

タ　行

立竹（たちだけ）　カゴを構成するタテヨコの編み竹のうちのタテ（上下方向にならぶタケ）にあたり，いわばカゴの骨組の役目をする。

力竹（ちからだけ）　カゴの底や胴の部分を強化するためにそえられる編み竹。

共縁（ともぶち）　立竹同志を組みあわせてカゴの縁をつくりあげる縁仕上げの手法。

ナ　行

野田口仕上げ（のだぐちしあげ）　内外一組の縁竹で胴の上部をはさみ，細い竹をいれて縁竹のあいだにできたすきまをふさぎ，それらをかがり竹でところどころ結ぶ縁仕上げの手法。

ハ　行

縁竹（ふちだけ）　縁仕上げの過程で，胴上端部にそえる編み竹で，内側にそえる内縁(うちぶち)，外側にそえる外縁(そとぶち)，それにシンになるシン竹などがある。

縁巻竹（ふちまきだけ）　縁竹をそえた後，そのうえに巻いて縁をととのえる編み竹のこと。

マ　行

巻口仕上げ（まきぐちしあげ）　胴の上端部（縁部分）を縁竹とも縁巻竹（ふちまきだけ）でいっしょに巻いて仕上げる縁仕上げの手法。

廻し竹（まわしだけ）　カゴの胴や底を編むとき，上下方向の立竹に左右方向に組みあわせる編み竹のこと。

身竹（みだけ）　タケの皮の部分をとりさり，皮の内側のいわゆる身（み）の部分だけをつかう編み竹のこと。

六つ目編（むつめあみ）　上下にむかう2方向の立竹と，左右にむかう廻し竹とを組みあわせ，六角形の編み目をつくりだす編み方。カゴ細工では，胴や底の編み方のひとつとして知られている。

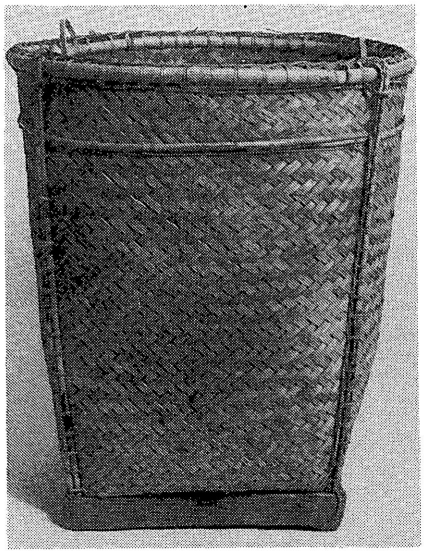
ヤ　行

四つ目編（よつめあみ）　タテヨコ2方向の編み竹を組みあわせて四角形の編み目をつくりだす編み方。胴または底の編み方としておこなわれている。

文　　献

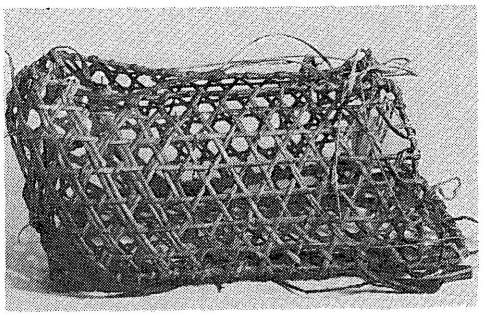
関西学院大学探検隊（関西学院大学第1次パラワン島学術探検隊）
1968 『パラワン島の人と自然』 関西学院大学探検会。
中村俊亀智（中村たかを）
1973 「六つ目の仲間たち」『季刊人類学』 4 (1)：66-93。社会思想社。
1977 「中国地方タケカゴ細工の一側面」『国立民族学博物館研究報告』 2 (4)：806-827。

1

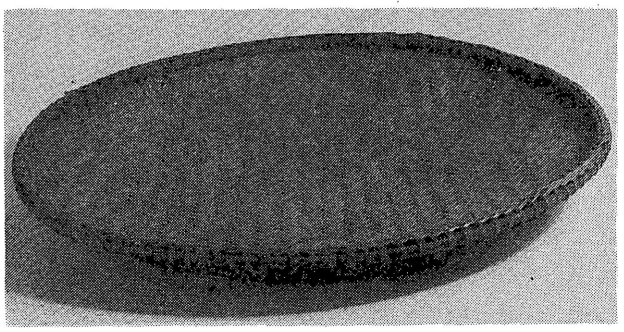


2

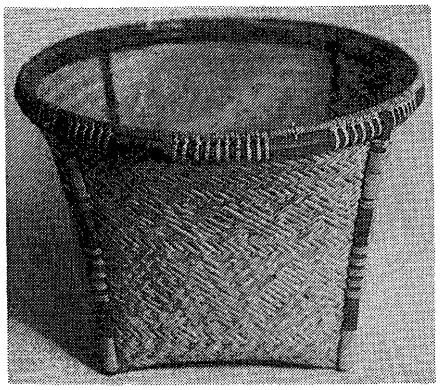
3



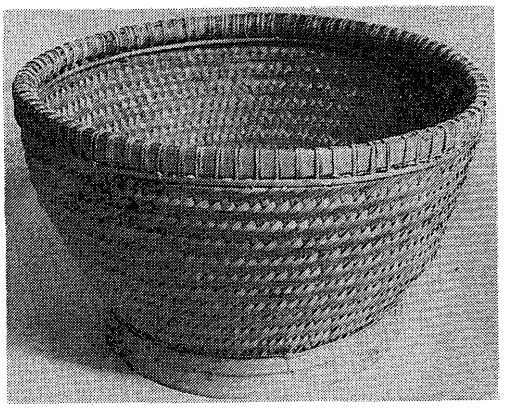
4



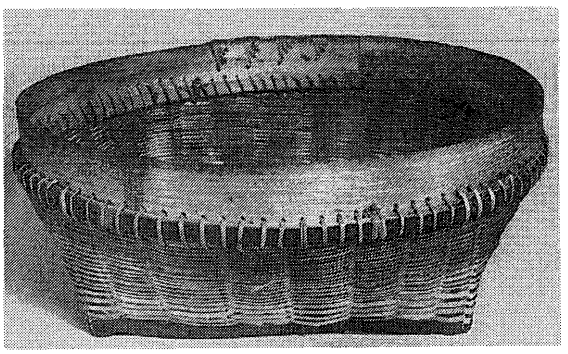
5



6



7



8

附　図　東南アジア島嶼部のカゴ細工

1　背負いカゴ（ジャワ島）　高さ 37 cm〔例 9〕
2　カゴ（パラワン島）　高さ 35 cm〔例 1〕
3　蓋つきカゴ（パラワン島）　高さ 27 cm〔例 3〕
4　背負いカゴ（ボルネオ島）　高さ 55 cm〔例 8〕
5　箕（パラワン島）　高さ 7 cm〔例 4〕
6　小物いれ（ボルネオ島）　高さ 18 cm〔例 6〕
7　カゴ（ジャワ島）　高さ 20.5 cm〔例10〕
8　ザル（ジャワ島）　高さ 15 cm〔例11〕